

# わが国の自任指導者たちは、ドラッグか憑依のバイデン状態から覚めよ

Greatchain

March 1, 2024

不思議な夢を見た。これは元安倍首相が暗殺された日に見た、恐ろしい不気味な夢以来のものだ。<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/220711.pdf> これは前のような恐ろしい夢ではなかった。しかし明らかに意味を持つ夢だった。私は生まれ故郷のものらしい、広く開けた浅い瀬の川に沿って走っていた。不思議なことに、どこまで走ってもこの川は、その真ん中を(地震によるような)断層が走っており、段差はわずか2, 30センチなのに、必ず水の流れる側と、水のない乾いた側に分かれていた。しばらくこの状態が続き、やがて川の真ん中に鉄製の櫓が見え、天辺には手すりのある展望台が設けてある。人々がそこに上って見物しているので、私も登った。ある人が私に近づき、「こういうことはみな〇〇だよ」と言った。この〇〇が今どうしても思い出せない。私は「〇〇って何ですか?」と訊いたが、彼は笑うだけだった。

夢の中ではそれはわからなかったが、今考えると「これは現実ではない、みんな比喩だ」と、言っていたものと了解できる。不思議なことに、それは展望台なのに、はっきり見えず、ただ川がこの先2つに分かれているらしいことしか、わからなかった。ただこの夢の中ではっきりしていたのは、どこを見ても全山が見事に紅葉しており、季節が晩秋だということだった。

これは何の夢だろうか? 私はこれは、多くの人々が言っているように、人々の意識に格差(断層)があらわれ、目覚める人々と、いつまでも眠り続ける人々——もう騙されなくなった人々と騙され続ける人々——の差が明瞭に生ずるようになる、そしてそれはこの秋にも実現する、ということだと解釈する。

「夢など見ていてはいけない、しっかり現実を見よ」というのが、普通の処世訓であろう。しかし、「夢を見ているのはどちらなのだ、あなたではないのか」ということが、今現実起こっている。

「どこまでもウクライナを援助し続ける、ロシアが倒れるまで援助し続ける」と誰かが言っている。これは現実感覚を全く失った、狂人の夢でしかない。

「タッカー・カールソンとブーチンの対談など、どうせ、ろくなものでないのだから、見ないように見せないようにしよう」というのも、ひたすら夢が覚めないように願う、幻影を信じて生きる者たちである。

Infowars の短い、ゼレンスキーと、彼に問いかける記者とのインタビュー「**世界は問う——ウクライナの独裁者は何をこんなにハイ状態になっているのか？**」

<https://www.infowars.com/posts/world-asks-what-is-ukrainian-dictator-high-on/> をご覧願いたい。

ウクライナの指導者ウォロジミール・ゼレンスキーは、最近にインタビューで、ある種のドラッグによる症状のようなものを示した。

アレックス・ジョーンズは、最近のウクライナ大統領ゼレンスキーとの、ある MSNBC インタビューを評し、彼はまたしても明らかに、ある種のドラッグの影響下にあることは間違いないと言った。

このフィルムにあるように、1936 年のナチス政権下のドイツ・オリンピックでも、ヒトラーが壇上で、何かに取り憑かれたかのような、身体を異常に動かしていることが明らかになっている。憑依とドラッグによる影響は別物かどうか知らないが、これはヒラリー・クリントンも、その種の異常を示したことがあり、更に言えば、バラク・オバマも、蠅のいるはずのないところで蠅にたかれるという、異常状態を示したことがある。

現在、ユーチューブを通じて起こっている、JW をきっかけとした、いわば世界的な霊的覚醒は、非常に意味深いものだとは私は考えている。旧来の宗派争いでなく、キリスト教もその聖書も、はたして信じられるかを問うてみるという運動が始まった。何か「神」について徹底的に変わらざるを得ないことになった。

その中で、エドガー・ケーシーという予言者が取り上げられる頻度が、多いことに注目すべきだと思う。彼はロシアを中心にして世界が変わると言った。そのテキストの一つにこう言っている——「**ロシアから世界の希望がやってくる。共産主義という観点からでなく、自由という観点から。それは結晶化する (crystalize) には何年もかかるであろう。しかしロシアは再び自由になるであろう。**」直観的には、おそらく誰もがそう感じている——ほとんど当然のようにそう思っているであろう。ただ、それを言わないように抑えつけている闇の勢力があり、それに加担している宣伝担当者が、苦し紛れに論を張っている。

最後に私の「自決のすすめ——良心をもつすべての関係者に告ぐ」という、2022年末の論文を再掲載することにする。これが相当の反感を買ったことは承知しているが、私の狙いはもともと人を怒らせることにあり、人と仲良くするためではない。

<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/221223.pdf>